

【書評】

松本栄寿著

『遙かなるスミソニアン —博物館と大学とアーカイブスと—』

Lessons From The Smithsonian

粕谷 崇*
Takashi KASUYA

“スミソニアン”、この言葉を耳にした人はいったい何を連想するであろうか。

“博物館”、多くの博物館が建ち並ぶ“博物館群”、あるいは“ワシントンDC”、また象徴的な意味での“アメリカそのもの”等々、まさに十人十色、様々であろう。

そのなかで博物館・美術館に携わっている方であるならば、“スミソニアン”と言う言葉に、格別なる思いを持っている方も多いのではないだろうか。単純に「一度は訪れてみたい」にはじまり、実際に「そこで働いてみたい」・「その職員になってみたい」と願う方もいるであろう。それを実際に自ら体験してしまったのが、この『遙かなるスミソニアン』の著者、松本栄寿氏である。さらに、その体験をバックアップし、実現可能にしたスポンサーが存在した。それが氏の勤めている横河電機である。実に、「羨望という言葉が当てはまるような境遇」と感じてしまったのは、私だけであろうか。

本書の内容を簡単に短く紹介するならば、著者が横河電機の企業博物館となるであろう“はかりの博物館”を作るために、日本で学芸員の資格を取得し、その後アメリカに約一年間留学した、その経験をまとめた体験記であると言える。スミソニアンの研究員として、またメリーランド大学歴史学科の学生として技術史について研究し、さらにはアメリカの主要なアーカイブスも自動車旅行をしながら巡り歩いた著者の軌跡を、堅苦しくなく、時折会話も交えた

表現でまとめられている。

著者は前述したように勤めている横河電機の命により、“はかりの博物館”を建設するための下準備としてスミソニアンに留学したわけだが、アメリカ歴史博物館ではキューレターのフィン博士の下で「はかり」、計測器の研究をする。また数多くの博物館のスタッフとの交流により、研究はもとより、資料収集について多くの情報を入手していく。読者に学芸員の研究のやり方について、滞り時のエピソードを交えながら紹介している。そのため博物館の裏側に関して、あるいは学芸員という言葉は知っていてもその実務について余り知識を有していない方であっても、すんなりとその方法、手順がつかめるような具合である。

ここ数年、博物館や美術館の裏側を描いた本が数多く出版されている。それらは概ねその著者自身が体験した内容を記述しているため、わかりやすい内容であり、本書もその種に入るであろう。

さて本書の構成を紹介しておこう。プロローグから始まり、I. ワシントンのスミソニアンへ、II. アメリカ歴史博物館の日々、III. メリーランド大学の学生、IV. 博物館のさまざまな展示、V. スミソニアンの基本方針、VI. ワシントン周辺のにぎわい、VII. 東海岸の博物館とアーカイブス、VIII. 西海岸のシリコンバレー、IX. アトランタとジョン、X. 博物館と技術史とアーカイブス、そしてエピローグとなっている。まさに著者の滞在中の体験談を、怒濤

* 渋谷区郷土博物館等開設準備会学芸員

のごとく列記していった内容である。

そのなかで注目したいのは、著者がスミソニアンで指導を仰いだキューレーター、バーナード・S・フィン博士の教えを忠実に実行しているという点である。学芸員の資格を取得してまもないということが、様々な点で著者に影響を与えたのではなかろうか。

その教えはプロローグのところで述べられている。その一部を列記するならば、

「単に上辺だけを観察するな。」

「アメリカの歴史博物館の展示について、1960年代の開館のころと1990年代との展示の差を見なさい。」

「技術の歴史をだどる博物館を造るなら、技術史を学べ。」

「『はかる博物館』を造るには自分でものを収集し、それをもとに研究して展示に生かすのがよい。」

その修業のためには、

「特徴ある博物館を見ることと、素材や文書を自分で探すことだ。」

である。

この意図するところは「はかり」だけでなく、「もの」であればすべてに共通する考え方である。だがこれを日本国内ではなくアメリカで、調査研究、大学での学生生活、資料集めの旅を行った、著者のそのバイタリティーには頭の下がる思いである。

スミソニアンでの滞在を紹介した本は、日本では初めてであると思うが、IV. 博物館のさまざまな展示、V. スミソニアンの基本方針では、スミソニアンの展示の考え方、思想が述べられており、参考になるだろう。

ただ全体を通して言えることは、このような体験談の場合、著者と読者との間をどのように埋めるかという問題がある。えてして、著者の独りよがりになってしまう危険性がある。実際にスミソニアンへいったことのある人、本書でバーチャル的にスミソニアンを体験した人、思いは様々である。

「はかりの博物館」は、いわゆる企業博物館に入るといえるだろう。その企業博物館のなかには、単なるPRのみのものも多い。いわゆるPR館である。ただ、私個人としては、ただのPRのみの館には“博物館”という言葉を使って欲しくない。幸いにして、この“はかりの博物館”というプロジェクトは学芸員を遙々アメリカに留学させるという、人材を育成することから始まっている。このことは、“博物館”をすることにより「はかりの文化」を追究しようという姿勢が会社自体にあり、それを如実に物語っているように思われる。その姿勢は、是非開館以後も続けていって欲しい。

最後に蛇足ではあるが、今回の“はかりの博物館”を作ろうとしている横河電機は、私が現在勤務している渋谷と深い関わりがある。それは横河電機の前身、「電気計器研究所」・「横河電機製作所」がはかりを作り始めた土地、それが実は渋谷なのである。創業は大正4年（1915）、東京市渋谷町下渋谷700番地に始まった。現在のJR線渋谷駅と恵比寿駅の間、東急東横線が渋谷から次の駅の代官山駅方面へ曲がる付近、そこから横河電機が始動し、現在の会社へと発展したのである。

今回の書評については、本来ならば理工系の方が道理とは思いますが、何かえにしを感じ、ペンを執った次第である。“はかりの博物館”が一刻も早く見たいと思ったのは、私一人ではないであろう。

1997年3月24日発行

玉川大学出版部

定価 2,575円

A5判、254ページ